┐7 根尖部病変に近接していた静止性骨空洞の1例

秋葉正一・青木秀史・尾嶋 徹

A case of static bone defect: Bone defect situated below the radicular cystic lesion of 2nd molar

Masakazu AKIBA・Hidefumi AOKI・Toru OJIMA

Key words: static bone defect (静止性骨空洞), salivary gland (唾液腺), sialography (唾液腺造影)

緒 言

一般に静止性骨空洞は、下顎管の下方で下顎角から第3大臼歯の間に、直径約1～3 cmの円形ないし類円形の、周囲との境界が比較的明瞭な孤立性の嚢胞様骨欠損像として認められている。著者らは、┐78の根尖部に境界不明瞭なX線半透過像を有する患者に遭遇し、精査の結果、異所性の顎下腺に起因する静止性骨空洞と診断した1症例を経験したので、その概要を報告する。

症 例

患 者：27歳 男性。

初 診：平成2年6月■日。

主 訴：┐8周囲の歯肉の痛み。

既往歴・家族歴：特記すべき事項なし。

現病歴：約1年前から┐8周囲の歯肉に疼痛が生じ、腫脹をくり返した。

全身所見：体格、栄養状態に異常所見はなかった。

現 症：口腔外に異常所見は認められず、口腔内所見では┐8が半埋伏状態であり、┐7にはインレーが装着されているが舌側根尖相当部粘膜に瘻孔が認められた。

X線所見：┐7根尖部は歯槽白線の消失と、根尖を含む円形のX線半透過像が、┐8の根尖部直下には境界不明瞭な類円形のX線半透過像が認められ、両者の間には骨様不透過像があり、また、それらの中に下顎管が重複して認められた(写真1)。

これらの所見より、┐7根尖部のX線半透過像は┐7が原因の慢性炎症によるものと診断した。しかし┐8根尖部直下のX線半透過像については、┐8が生活歯と考えられること、歯根周囲の白線が明瞭であること、また、

写真1 初診時パノラマX線所見

わずかではあるが、根尖と離れていることなどから非歯源性と考えられた。

精査のために追加したX線CT像(写真2)では、矢印のごとく、下顎骨骨体に認められる類円形透過像の一部に舌側皮質骨の欠損像を認め、骨欠損部内と口腔軟組織とのX線CT像の密度は同程度であった。パノラマX線写真およびX線CT写真の所見より、口腔軟組織(特に顎下腺)との関連を疑い、顎下腺造影検査(写真3)を行った。造影所見では顎下腺管は途中で2分しており、1つは下方へ、他は┐8直下の骨欠損腔内へ入っていた。

以上から、┐78根尖部に認められた2つの類円形X線不透過像は、┐7に起因する根尖性歯周炎およびそれに隣接する静止性骨空洞と臨床診断した。

処 置

┐7に対しては抜歯と根尖部の搔爬を、┐8に対しては歯肉弁切除を施行し、静止性骨空洞に対しては特に処置を行わず経過観察とした。なお、┐7の根尖病巣と静止性骨空洞とは硬い硬組織で境されており、交通は認められなかった。

総合病院国保旭中央病院歯科口腔外科

(主任：秋葉正一部長)

Department of Dentistry and Oral Surgery, Asahi General Hospital (Chief: Masakazu Akiba)

受付日：平成3年3月18日

写真2 X線CT所見(矢印は舌側皮質骨の欠損像)

考 察

静止性骨空洞の発見年齢は、われわれが渉猟し得た限り田畑¹⁾の報告にある83歳が最高齢で、低年齢者としてはHansson²⁾が初診時下顎に異常を認めなかった11歳の男子について、矯正治療開始後のX線検査(初診より18か月)にて本症の存在を発見したと報告しており、この報告例が最年少と思われた。また、本症発見の平均年齢についてはStafne³⁾は53.4歳、古跡⁴⁾は47.4歳と述べており、男女比についてStafne³⁾は28対6、古跡⁴⁾は52対10と報告しているが、両報告とも約5対1の割合で男性に多く、人種差は認められなかった。本症例は27歳の男性であり、低年齢者の範疇に入るものと考えられた。

高谷⁵⁾は1942～1983年までの報告例について文献検索を行い、230例中206例(89.6%)が下顎角付近に存在していたと述べているが、その内容については、外科的検索を受けた58例において、39例(67.3%)が唾液腺組織であったと報告している。

成因については現在まで確定されておらず、そのために呼称もさまざまである。しかし、内容物の大部分が正常唾液腺組織であることや好発部位などから、近年においては周囲組織の圧迫によって生じた後天的な骨欠損であるという考え方が支持され、Bone defect の名称が適当と考えられている^{6,7)}。

診断においても同様の理由から、通常のX線検査の他に、顎下腺造影撮影⁸⁾を施行することが必要とされているが、X線CT撮影や顎下腺造影X線CT撮影も有効と考えられる。

一般に本病態は著明な骨硬化像を示す病変辺縁と下顎骨皮質骨が連続している特徴のある所見⁷⁾が得られるというが、本症例では、この所見は認められなかったこと、下顎管との重複像が認められたこと、さらに半透過像の上縁が[8]の根尖付近にまで波及していたことなど、

写真3 顎下腺造影所見

典型的な静止性骨空洞とはそのX線写真像を異にしており、当初[7]の根尖部病変の拡大とも考えたが、X線CT撮影・唾液腺造影撮影により鑑別し得たので、これらの撮影法併用の有用性を再確認したものである。

結 語

歯原性嚢胞様疾患と誤認しやすい位置およびX線像を示した静止性骨空洞の1例を経験したので報告した。

引 用 文 献

- 1) 田畑 修, 黒木敬士, 他: 顎下腺造影により確認された“Static Bone Defect”の1例. 歯放 22: 348-349 1983.
- 2) Hansson, L.-G.: Development of a lingual mandibular bone cavity in an 11-year-old boy. Oral Surg 49: 376-378 1980.
- 3) Stafne, E.C.: Bone cavities situated near the angle of the mandible. J Am Dent Assoc 29: 1969-1972 1942.
- 4) 古跡孝和, 川崎靖典, 他: 静止性骨空洞のX線診断的検討(62症例)(抄). 歯放 28: 353 1988.
- 5) 高谷康男, 西嶋克巳, 他: Idiopathic Bone Cavityの2症例およびその文献的考察. 口科誌 34: 225-232 1985.
- 6) Karmiol, M. and Walsh, R.F.: Incidence of static bone defect of the mandible. Oral Surg 26: 225-228 1968.
- 7) 江原昌弘, 内海 潔, 他: いわゆる Developmental Bone Defect 24 症例のエックス線写真の検索. 歯放 17: 44-51 1977.
- 8) 佐藤泰則, 埜口五十雄, 他: 顎下腺造影により診断した静止性骨空洞の1例. 日口外誌 34: 1437-1443 1988.